

## 『柔道・友情・平和』の実現を目指して

—崇高な精神を引き継ぎ、スポーツを通して未来を拓こう—

理事長 山下 泰裕

NPO 法人柔道教育ソリダリティーのモットーは、『柔道・友情・平和』です。この言葉は、対人競技である柔道の練習を通してたがいに励まし合って心技体を向上させ、その過程で信頼を培って固い友情を育み、もって平和で豊かな社会を築く人間になることを意味しています。私は柔道の競技者として、指導者として、また国際柔道連盟の理事として世界における普及活動に従事した経験から柔道のスポーツとしての魅力と課題を認識しています。さらに講道館柔道を創始した嘉納治五郎師範が掲げた『精力善用・自他共栄』の精神、及びピエール・ド・クーベルタンが提唱したオリンピックの精神(オリンピズム)に深く共鳴しております。

もし、「何のために柔道が続けるのか？」と問われたならば、私はこれらの言葉を答えとして挙げるでしょう。柔道の精神も、オリンピックの精神も、そして私達のNPO 法人のモットーも、スポーツを通してお互いを理解し世界平和に貢献することを表明しています。最強の競技者になることがスポーツの最終的な目的ではありません。心身のバランスの取れた人間になること、互いに助け合い、平和な社会をつくり支える人間になることが目的なのです。

4年前、私は多くの人たちの協力と支援によって NPO 法人柔道教育ソリダリティーを設立しました。国際的普及の課題に対応するとともに柔道の社会的使命を果たしたいと考えたのです。事業の柱は、「柔道の国際的普及」、「柔道を通じた文化交流・異文化理解」、「柔道による青少年育成」の三つです。そして、モットーとして『柔道・友情・平和』を掲げました。

このモットーは、私が考え出したものではありません。種を明かせば、尊敬する東海大学創立者の松前重義先生が国際柔道連盟会長時代(1979～1987)に掲げられていたモットーです。それをそのまま引き継ぎました。もちろん言葉のみではなく精神を継承し伝えなければならないと心に誓ったからです。松前重義先生は、科学技術者、官僚、教育者、政治家、国際活動家、そして武道家として激動の20世紀を生き抜かれました。嚆矢に接した一人として、私は、その思想と行動が「世界の人々の心をつ結び

平和な社会を築く」という信念に貫かれていたことを知っています。高齢にもかかわらず国際柔道連盟会長に立候補されたのも、その一念であったといえます。昨年、30年前(1979年12月)の国際柔道連盟会長就任を回顧する会を開きましたが、その折、当時、立候補を決意された心境を綴った資料を目にすることができました。この文章は、秘書の兼弘法子様が記録されていたもので初めて公開される資料です。すぐに「国際柔道連盟会長立候補にあたって」を読み、私は心打たれ、生前、松前重義先生によく言われた言葉を思い起こしました。

「山下君を応援するのは、柔道で強くなり優勝してほしいからだけではないんだよ。その精神を理解し大きな人間になってもらいたい。世の中のために尽くし、活動する人間になってもらいたいからなんだよ」

行間から、松前先生の、あの太い声が聞こえ、叱咤激励されました。

『柔道・友情・平和』のモットーは、松前重義先生の志です。NPO 法人柔道教育ソリダリティーが掲げる理念と行動指針は、このモットーに示されています。

本法人の趣旨及び諸活動に賛同し協力くださる皆様方に「国際柔道連盟会長立候補にあたって」を是非ご一読賜りたいと思い、ここに資料として発行することにいたしました。これによって私達の活動の輪がさらに広まることを望む次第です。

## 国際柔道連盟会長立候補にあたって

昭和54年4月

松前 重義

昨年12月、私が“国際柔道連盟の会長”に立候補を宣言し、それが新聞紙上を通じて公表されたとき、早速、私の耳に入ってきた反響は、国際柔連の会長は日本人じゃあなかったのですか、というものであった。日本が生んだスポーツであり、今やオリンピックに採用され、世界中にひろまった柔道の国際組織の会長が日本人でない、ということが、柔道に直接関係ない人々には容易に信じられなかったからであろう。実は国際柔連の会長席は、もう14年前から日本のものでなく、イギリス人のパーマー氏が就任していたのである。

しかし、私がこのポストに立候補したのは、日本が生んだ世界競技の会長を、日本に取り戻すというような、偏狭なナショナリズムから生まれた発想からではない。日本で生まれたスポーツが国際化し、その連盟の長に外国人が就任することは、その競技が世界に認められたなよりの証明であり、ある意味では喜ぶべき事態ともいえるからである。にもかかわらず、私があえてこのポストに立候補したのは柔道という、国際化したスポーツをさらに世界に広めてゆくためには、なんといっても、このスポーツの祖国である日本が、総力をあげて取り組んでゆくことが不可欠であると考えのと、そのことが日本を世界に理解させ、国際社会の中での日本の地位を、戦力の拡充や経済力の強化といった、いま、わが国が世界各国から批判されている方向ではなく、平和、かつ友好的な方法で向上させてゆくうえで絶対に必要なことではないかと考えたからである。

私は、この10年間、東海大学の総長として、また世界各国との学術文化交流を業務とする日本対外文化協会の会長として、東・西を問わず、多くの国々を歴訪してきた。そして、そのなかで二つの事実をつぶさに感じとってきた。一つは、海外における日本への理解が実に不足しているというか、誤解も少なからずあり、結果として、日本の評価が極めて低いものであるということ。もう一つはこ

のような状態の中でも、柔道や空手という日本が創造したスポーツだけは、驚くべき普及をとげ、多くの国の人々に愛されているという事実である。

かつてフランスのドゴール大統領が、日本の首相を評して、「トランジスタの商人」といった有名な言葉がある。確かに日本の著しい経済成長は、各国から高く評価され、その製品の優秀さも、かつての安価不良というイメージは消えつつある。しかし、その工業製品の改良が外国人の日本と日本人に対する尊敬にまで発展しているかといえ、残念ながら否である。というのは、日本製品は優れてはいるが、国際商品化しているものの大半は、オリジナリティーが欧米にあり、日本人は、それを部分的に改良したに過ぎなかったからである。

その意味でドゴール大統領の発言は、ヨーロッパの日本および日本人観のシンボリックな表現であったといつてよい。

率直にいうと、ヨーロッパ社会において、日本人と中国人とのどちらが尊敬を集めているかといえ、それは疑いなく中国人である。というのは、中国の現状が最新の工業製品をつくり出す能力がなくとも、その歴史が創造し上げたオリジナリティーのある文化は、広くヨーロッパで理解され、それが中国と中国人への尊敬につながっているからである。

日本にすぐれた文化がなければ話は別である。むしろ中国の四千年の歴史に比類することができないにせよ、わが国にも世界に誇る文化はある。私は毎年、コペンハーゲンに設置している東海大学ヨーロッパセンターを中心に、日本の図書展や文化祭を開催し、そこにはデンマークの政府関係者や市民が多数参加するが、いずれも日本文化に強い興味を示し、日本への理解を深めている。また五年前、サントリーの佐治社長の協力のもと、モスクワのプーシキン美術館で、日本の伝統工芸展を行ったが、その折、約十万人の観客の殆どの、日本の伝統工芸の持つデリケートな美に対する驚嘆のまなざしをいまでも忘れることができない。そして、これらの催しに参加した人々は、いずれも日本が経済力の強い国であることだけではなく、その美術や広い意味における文化の高さ、しかも、それが独特の創造であることを認識したに違いない。

最近でこそよく指摘されるようになったが、日本政府の海外文化交流費や留学生交流のためについやしている経費は、欧米の先進諸国と比較して驚くほど少ない。これでは、海外の日本に対するイメージが改善できないの

は当然であり、日本人への尊敬が深まらないのも当然である。

欧米先進国が、自国語や自国の事情を研究しようとする外国人に与えている便宜も、ここで強調しておく必要がある。実に多くの日本人がアメリカのフルブライト留学生制度や、西独のエーベルト財団、さらにはフランスのアテネ・フランセーズから各種の恩恵を受け、外国に留学し、勉強しているが、それに対し、日本がどれだけのことをしたか、考えればまことにはずかしい次第である。

話は少し脇道にそれるが、私が昨年設立した「松前国際友好財団」は民間の弱い力ではあるが、海外の日本研究者を日本に招へいし、奨学金を与え、欧米先進諸国が日本人に与えてくれた恩恵に応え、かつ恵まれない状態で日本を研究しようとする開発途上国の研究者に便宜を図ることを目的としたものである。

ともかくも、文化交流や留学生交流を積極的に推し進め、日本の伝統や文化の現状についての相互理解をはからない限り、経済強国日本に対する国際的な批判は今後強まりこそすれ、改善されることはないだろう。その意味でわが国は追い込まれた状況にあり、いまこそ積極的な手を打つ必要にせまられているのである。

では、どのようにして日本の文化を海外に紹介するか。そして、文化を通じて日本への理解と尊敬を深めてゆくか。

私は、この核になるものこそ、柔道であると考えている。

むろん、かつて成功したように日本の伝統工芸や、美術の海外展を行うこともよいだろう。すでに指摘したように、留学生や研究者の交流をはかることも大切である。しかし、このような仕事は時間のかかる問題であり、美術展を恒常的に実施することは不可能であろう。しかし、このような狭い範囲から一歩視野を広げると、まさに柔道という、日本が生みだした広い意味での文化の産物がこれまで日本政府の手を借りなかつたにもかかわらず、現に世界各国に普及し、人々をとらえ、愛され、柔道人口はいまも日々増加の一途をたどっているのである。

欧米の都市に柔道道場のない街は少ない。小さな市のスポーツ・クラブをのぞいてみれば、そこには必ず柔道と空手クラブがあり、熱心な日本人コーチか、そのコーチによって指導された外国人が、大勢の人の指導に励んでいる。そして、日本人が考案したスポーツを、柔道衣を着用し、日本語で楽しんでいる。

そして、それらの人々は、単に身体を動かすだけでなく、日本に親近感をいだき、柔道を通じて日本の精神を理解し、ひいては日本との友情を培っているのである。

世界の人々が柔道を愛し、親しむのは、柔道こそ、日本のオリジナリティーをもったスポーツであり、そこに、なにもに代えられない価値を発見したからである。

私が国際柔道連盟の会長に立候補したのは、この世界の人々に愛され親しまれた柔道のより一層の普及を通じて、日本の文化を世界に理解させ、日本のイメージを変え、新しい日本像をつくりだすためでもある。私は突然この立候補を決意したのではない。私は私なりにこの十五年間にわたって考え、そして行動してきた、文化の国際交流の仕事一環として、そしておそらく最後の仕事として、この立候補を決意したのである。

日本に文化的オリジナリティーを有する柔道の国際化を外国人にゆだねるには、まだ時期が早い。日本はこの分野でまだまだなすべきことがある。この点については、日本政府にもこれからの大きな助力を求める必要がある。例えば世界各国のうちには、フランスやデンマークやソ連のように、国や市のスポーツ委員会の保護のもとで完備した道場やコーチを有し、市民の自由な参加が保障されている国もあるが、まだ多くの国では道場や設備も不足し、コーチ陣も弱い。教科書も不足している上に、よい教科書も少ない。元来、日本語で書かれた柔道教本を翻訳することは難しい仕事だからである。

日本にはこれらの不足をおぎなうべく努力をもっと重ねる必要がある。

各国の道場建設に協力する。ある場合は、思いきった資金援助を行ってもよいではないか。自動車やトランジスタの競争は各国から警戒心を招く。政府だけでなく、日本の産業は雇用を圧迫するという理由で労働組合からの反発も強くなっている。この点、スポーツとしての柔道の普及は、人々に喜ばれはすれども批判されることはない。肉体を鍛え、健康をもたらす、その結果として世界の人々の日本への親近感と理解をもたらし、とすれば、まさに一挙両得ではないか。

日本は、官民あげて柔道外交を心がけるべきであり、このためには、国際柔連の会長はいまのところ日本人が就任する必要がある。

そして、将来は、世界に柔道や空手の道場を数多くつくり、各国語で柔道入門書や教科書を発行し、普及のためのコーチの育成にのりだし、いま以上、柔道が世界ス

ポーツとして確立したときこそ私は、国際柔連の会長にどこの国の人が座ってもよいと考えている。

残念ながら、日本人が国際柔連のポストを失ったことは、日本が世界柔道界の指導を放棄したこともあった。

しかし、いま述べた仕事を強力に推し進めるためには、なんといってもこのポストを日本人の手にとりもどすことが必要である。

私は昨年、喜寿を祝ってもらった。そして私は残された生涯を、十五才の時から六十年以上、熱愛してきた柔道と、その道を通じて日本将来に明るい展望を切り開く仕事にささげることを決意した。そして、この仕事はスポーツによる世界の交流の発展という面から世界の平和にも寄与できるだろう。

柔道は、最も平和的かつ礼節を重んずるスポーツであり、それは日本の精神の結晶であるといつてよい。私は、この精神を世界に広めてゆきたい。

## 努力实现“柔道、友情与和平”

—传承崇高精神，通过体育运动开拓未来—

理事长 山下 泰裕

NPO 法人柔道教育团结协会的宗旨是“柔道、友情与和平”。这句话的意思是，通过练习柔道这种人对人的竞技运动，相互勉励，磨练提升意志、技巧和体质，并在这一过程中建立信赖，培育坚定的友情，最终成为能为构建和平而繁荣的社会做出贡献的人。作为一名柔道运动员、教练，同时作为国际柔道联盟的理事，基于多年从事全球推广活动的经验，我深刻认识到了柔道作为一项体育运动的魅力和课题。同时，讲道馆柔道创始人嘉纳治五郎宗师倡导的“精力善用、自他共荣”精神，以及皮埃尔·德·顾拜旦倡导的奥林匹克精神，也令我深感共鸣。

如果有人要问我，“为何执着于柔道？”，或许我会将上述言论作为自己的回答。无论是柔道的精神还是奥林匹克精神，以及我们 NPO 法人的宗旨，全都表明了要通过体育运动来增进相互理解，为世界和平做出贡献的思想。成为最强的竞技者，并非体育运动的最终目的。真正目的应该是成为一个身心平衡发展的人，成为一个具有互助精神，能够为营造和平社会贡献力量的人。

四年前，在各界人士的协助与支持下，我建立了 NPO 法人柔道教育团结协会。成立本会的初衷在于应对全球推广这课题，履行柔道的社会使命。“柔道的全球推广”“基于柔道的文化交流和异文化理解”“借助柔道培养青少年”，这是我们事业的三大支柱。此外，我们提出了“柔道、友情与和平”的宗旨。

这一宗旨并非本人提出的高见。追本溯源，这是我所敬重的东海大学创始人，松前重义先生在担任国际柔道联盟会长一职时(1979~1987 年)提出的宗旨。我们原原本本地继承了这一宗旨。当然，我决心继承并弘扬先生的精神，而并非单纯保留语言本身。作为科学家、官员、教育家、政治家、国际活动家和武术家，松前重义先生走过了激荡起伏的 20 世纪。作为亲承警效的一人，我很清楚先生的思想和行动中始终贯穿着“沟通世界人民的心灵，构建和平的社会”这一信念。尽管年事已高，仍然参加了国际柔道联盟会长一职的竞选，可以说也是他对自身信念的一种坚守。去年，我们举办了回顾 30 年前(1979 年 12 月)先生就任国际柔道联盟会长的纪念活动，

借此机会，我也有幸看到了记录着先生决意参选时的心境的资料。这是由先生的秘书，兼弘法子女士记录的资料，尚属首次公开。我迫不及待地读起了这篇《值此竞选国际柔道联盟会长之际》，深受感动，回忆起了松前重义先生生前经常对我说的话：

“我之所以支持山下君，并非仅仅是希望你在柔道方面变强，成为冠军。而是希望你理解柔道的精神，成为一个伟大的人。希望你成为一个愿为社会奉献的人”。字里行间，我仿佛听到了松前先生那浑厚的话音，深感鞭策和鼓舞。

“柔道、友情与和平”的宗旨是松前重义先生的宏愿。这一宗旨也体现了 NPO 法人柔道教育团结协会的理念和行动方针。

我衷心希望赞同、支持本协会宗旨和各项活动的各界人士都能读一读这篇《值此竞选国际柔道联盟会长之际》，因此决定刊发此文以供大家阅览。我也期待着它能感召更多人士加入到我们事业活动的大家庭中来。

## 值此竞选国际柔道联盟会长之际

1979年4月

松前 重义

去年12月，我曾宣布将会竞选国际柔道联盟会长一职。当报纸上登出此消息后，我很快听到这样一种声音，难道国际柔道的会长不是日本人吗？柔道运动诞生于日本，如今已纳入奥运会比赛项目，在世界各地都得到了发展推广，而柔道的国际组织的会长竟然不是日本人，这与柔道并无直接关系的人们恐怕难以相信。实际上，国际柔联的会长席位早在14年前就一直不属于日本，而是由英国人派玛先生担任该职务。

然而，此次我提出竞选这一职务，并非是出于想为日本夺回自己创造的全球性竞技运动的会长之位的这样一种狭隘的民族主义情绪。因为，诞生于日本的运动实现国际化，并由外国人就任其联盟领袖，这正是该竞技运动得到世界认可的最好证据，从某种意义上而言，也可以说这是十分可喜的。尽管如此，我之所以提出要竞选该职务，是因为我认为，要想将这一国际化运动进一步推向世界，关键是作为该运动的祖国日本，必须全力以赴，此外，这也是让世界理解日本，并且是通过和平友好的方法，而非提升战斗力和经济实力等遭到世界各国批判的途径来提高日本在国际社会中的地位的一步。

10年来，作为东海大学校长，同时作为主要从事与世界各国开展学术文化交流的日本对外文化协会会长，我访问了世界各地的许多国家。在此期间，我深刻体会到两个事实。一是海外实在缺乏对日本的了解，或者说存在不少误解，结果导致对日本的评价极低。二是即便在这样的情况下，柔道和空手道这两项日本创造的运动仍以惊人的速度得到推广，受到了各国人民的喜爱。

过去，法国的戴高乐总统曾留下一句评价日本首相的名言，“晶体管商人”。诚然，日本经济的显著增长获得了各国的高度评价，产品的优良品质也改变了过去廉价劣质品的形象。不过，工业产品的改良是否发展进步到了外国人对日本及日本人的尊敬呢，非常遗憾，答案是否定的。原因在于，尽管日本产品做工精良，但国际商

品化的物品中，大部分原创技术都为欧美所掌握，日本人仅仅是对这些物品进行了局部改良而已。

从这个意义而言，戴高乐总统的发言可以说是欧洲对日本及日本人所持观点的象征性表述。

坦率地说，如果要问在欧洲社会中，日本人和中国人哪一方更受到尊敬，答案无疑是中国人。原因在于，即使现在的中国不具备创造最新工业产品的能力，但中国历史孕育的具有独创精神的文化，获得了欧洲各界的广泛理解，进而产生了对中国及中国人的尊敬。

假如日本缺乏优秀文化则又另当别论。尽管不及中国的四千年悠久历史，但我们国家也拥有引以为傲的文化。每年，我都会以设在哥本哈根的东海大学欧洲中心为基地，举办日本图书展和文化节，总会吸引丹麦政府人士及众多市民前来，他们都对日本文化表现出浓厚兴趣，也由此加深了对于日本的理解。此外，5年前，承蒙三得利的佐治社长的大力支持，我们在莫斯科的普希金美术馆举办了日本传统工艺展，当时约有10万人前来参观，几乎所有人都对日本传统工艺的细腻之美投来了惊叹的目光，这令我至今仍难以忘怀。而参加过这些活动的人们，不再只是知道日本是个经济强国，他们无疑也了解了日本的美术及广泛意义上的文化高度，并且认识到了这是一种独特的创造。

正如最近人们经常提到的问题，与欧美发达国家相比，日本政府用于海外文化交流及留学生交流的经费少得几乎令人吃惊。如此一来，海外自然无法改善对日本的印象，也不可能加深对日本人的尊敬。

在此也必须强调一下欧美发达国家为有志于研究本国语言和本国情况的外国人提供的便利。其实，许多日本人获得了美国福布莱特留学生制度、西德的艾伯特财团以及法国的Athenee Francais提供的各种优待，前往外国留学深造，但与此相对，日本又付出了多少呢，细想起来真是让人觉得惭愧。

这里说点题外话，我在去年设立了“松前国际友好财团”，虽是民间团体，力量微薄，但我们提出了两个宗旨，一是要回报欧美发达国家为日本人提供的恩惠，二是要在艰苦环境下仍坚持研究日本的发展中国家的研究者提供便利，比如邀请海外的日本研究者来访日本，提供奖学金等。

总之，如果不积极推进文化交流和留学生交流，不促进针对日本传统和文化现状的相互理解，那么，想必今

后国际社会对经济强国日本的批判只会越来越强烈，而不会得到改善。从这个意义而言，我国正处于十分不利的窘境，亟待采取积极措施。

那么，应该怎样向海外介绍日本的文化，并通过文化来增进海外对于日本的理解和尊敬呢。

我认为，其核心正是柔道。

当然，效仿过去的成功做法，在海外举办日本传统工艺和美术展览也是不错的。而正如我之前提到的，促进留学生和研究者的交流也是非常重要的。然而，这些工作都是耗费时间的问题，长期固定举办美术展恐怕是不太可能的。但是，如果跳出这个狭窄范围，将视野拓展一步，正是柔道，这个日本创造的广义上的文化产物，尽管从未依靠过日本政府的帮助，现在却已传播到世界各国，赢得了人们的喜爱，练习柔道的人数至今仍在日益增加。

几乎所有的欧美都市都建有柔道道场。看看小城市的运动俱乐部，必定开设有柔道和空手道班，热心的日本教练，或是接受过教练指导的外国人，在用心指导着众多练习者。并且，大家都身着柔道服，用日语谈论着由日本人发明的运动。

大家不仅是单纯地锻炼身体，而且对日本产生了亲近感，通过柔道理解了日本的精神，甚至培养了与日本的友情。

全世界的人们之所以喜爱柔道，亲近柔道，正因为柔道是充满日本原创精神的运动，他们从柔道中发现了无可替代的价值。

我提出竞选国际柔道联盟会长，也是为了通过进一步推广深受世人喜爱的柔道运动，促进世界理解日本文化，改善人们对日本的印象，塑造全新的日本形象。竞选的决定并非突发奇想。作为我历经15年深思熟虑而坚持开展行动的文化国际交流工作的一环，同时也作为或许是最后的一项工作，我下定了此次参选的决心。

对日本而言，要将拥有文化原创性的柔道的国际化工作托付给外国人还为时尚早。在这一领域，日本还有许多应该做的事情。关于这一点，今后还必须向日本政府寻求大力支持。比如，在世界各国中，像法国、丹麦和苏联一样，一些国家和市级体育委员会给予了相关保护，道场的设施和教练齐备，使市民的自由参加得到了保障，但尚有许多国家的道场和设备不足，教练队伍也比较薄

弱。除了缺乏教科书外，优秀的教科书也比较少。这是因为，翻译原本采用日语书写的柔道教材是一项艰难的工作。

作为日本，必须要更加努力地弥补上述不足之处。

要协助各国修建道场。某些情况下，大力实施资金援助也未尝不可。汽车和半导体的竞争将招来各国的警戒心。不仅是政府，各国的劳动工会组织也以影响就业为理由，越来越排斥日本产业。就这一点来说，作为运动的柔道的普及，即使不能受到人们喜爱，也不至于遭到批判。它可以锻炼身体，带来健康，如果最终还能促进世界人民对日本加深理解、产生亲近感的话，这简直就是一举两得。

日本应该注意官方与民间携手促进柔道的普及，因此，国际柔联的会长现在需要日本人来担任。

至于将来，我认为，当我们在世界各地建立了大量柔道和空手道道场，发行多种语言的柔道入门书和教科书，为普及柔道积极培养优秀教练，使柔道进一步确立了作为国际性运动的地位后，就可以将国际柔联会长之位交给任何国家的人了。

遗憾的是，日本人失去国际柔联的席位，也意味着日本放弃了对世界柔道界的指导。

但是，为了大力推进上述工作，关键是日本人必须将这一职位夺回手中。

去年，我度过了77岁生日。而我已经决定，要将余生奉献给自己从15岁开始热爱了60多年的柔道，并通过这一过程为日本开辟一个光明的未来。同时，从通过体育运动促进世界的交流发展的角度来看，这项工作必然也能够为世界和平做出贡献。

柔道是最注重和平与礼节的运动，可以说它是日本精神的结晶。我希望将这种精神传遍全世界。

## Steps toward realizing our motto “Judo, Friendship and Peace”

— Inheriting a noble spirit and forging a peaceful future through sport —

Yasuhiro Yamashita, Executive Director

The motto of NPO-Solidarity of International JUDO Education is “Judo, Friendship and Peace,” meaning that players of judo, which is a person-to-person competitive sport, encourage each other to improve their mind, skills and body through practice and, in the process of practice, build relationships of trust and strong friendships, thereby becoming persons who can contribute to creating a peaceful and fulfilling society. I appreciate the attractive aspects and issues associated with judo as a sport through my experience of promoting judo around the world, both as a judo competitor and instructor as well as a director of the International Judo Federation (IJF). I also sympathize with the spirit of “Seiryoku Zenyo (minimum energy, maximum effect)” and Jita Kyoei (prosperous coexistence for oneself and all other things)” advocated by Master Jigoro Kano, the founder of Kodokan Judo, and the modern Olympism conceived by Pierre de Coubertin.

If asked why I continue judo, I would respond with these words. The spirit of judo, the spirit of the Olympics, and the motto of our NPO all advocate understanding of others through sport, thereby contributing to world peace. The ultimate goal of sport is not to become the strongest competitor but to grow into a person who has a well-balanced body and mind and who can help others to create and maintain a peaceful society.

Four years ago, I established the NPO-Solidarity of International JUDO Education with the cooperation and support of many people, to address the issues involved in spreading judo worldwide and fulfilling the mission of judo in society. The organization has three major objectives: global dissemination of judo, cultural exchange and cross-cultural understanding through judo, and youth education through judo. Its motto is “Judo, Friendship and Peace.”

This motto was created not by me, but by Dr. Shigeyoshi Matsumae, a person whom I greatly respect

and the founder of Tokai University, while he was serving as President of the IJF from 1979 to 1987. I use his motto as is, and of course I have pledged not only to inherit the phrase alone but also his spirit. Dr. Matsumae lived through the turmoil of the 20th century as a scientist, bureaucrat, educator, politician, international activist and *budoka* (martial artist). As I had the honor of directly communicating with him, I know well that his ideas and actions were always underpinned by his determination to connect people around the world to build a peaceful society. I believe that this determination drove him to run for IJF President despite his old age. When we met last year to look back on his becoming IJF President in December 1979, 30 years earlier, I had an opportunity to see a document in which he described his decision to run for president. This document, which was recorded by his secretary, Noriko Kanehiro, was presented publicly for the first time at this meeting. As soon as it was exhibited, I saw an article “Upon Running for the President of the International Judo Federation.” Deeply impressed, I remembered what he had often told me: “I encourage you not just because I want you to become stronger as a judo player to win competitions. I want you to understand the spirit of judo and to become a respected person. I want you to dedicate yourself to being of service to society and to play a leading role in serving society.” As I read these words, I could hear his deep voice between the lines inspiring and encouraging me again. The motto “Judo, Friendship and Peace” is the belief of Dr. Matsumae, and it conveys the philosophy and principles of the Solidarity of International JUDO Education.

I have decided to publish the article as a reference, to enable all those who agree with the objectives and activities of our organization to read “Upon Running for the President of the International Judo Federation.” I hope this will help expand our network of activities.



## **Upon Running for President of the International Judo Federation**

April 1979

**Shigeyoshi Matsumae**

When I declared my candidacy for the president of the International Judo Federation last December, and after the announcement was made public in the newspapers, the initial reaction was surprise that the president of the International Judo Federation was not Japanese. People not directly involved in Judo might naturally expect the president of the international organization of Judo, a sport that originated in Japan, spread worldwide, and is now part of the Olympics, to be Japanese. But in fact, for the past 14 years the post has been filled not by a Japanese person, but by Mr. Palmer, an Englishman.

However, I did not submit my candidacy based on narrow-minded nationalistic ideas such as claiming back the presidency of Japan's international sport for the country. Although the sport originated in Japan, it went global and the federation was headed by a foreigner. This just goes to show how well the sport is accepted around the globe, which is a good thing. Nevertheless, I finally decided to run for president because I believe it is essential for Japan, the birthplace of the sport, to launch a full-scale effort to spread the sport worldwide. I also thought that this effort would help Japan to be understood by the world. I believed it was crucial for Japan to improve its international standing in a peaceful and friendly manner, rather than through increasing its strength and economic prowess, which is why Japan is currently criticized by the world.

For the past 10 years, as the president of Tokai University, and as the president of the Japan Cultural Association, which promotes academic and cultural exchanges with countries around the world, I have visited many countries, both in the West and East. And

through these visits, I have come to strongly appreciate the following two facts. First, there is a poor understanding, and even misunderstanding, of Japan in other foreign countries, and so the global opinion of Japan is quite low. The second fact is that even under these conditions, sports that originated in Japan such as Judo and Karate have managed to spread throughout the world and become popular in many different countries.

de Gaulle, a former French President, once famously referred to the Prime Minister of Japan as a "transistor salesman." Japan's striking economic growth was of course highly regarded by other countries, and with its superior products, the old image of Japan as a producer of cheap low-quality goods is gradually disappearing. Unfortunately, however, improved industrial goods have not led to respect for Japan and Japanese people in foreign countries. That is because even though Japanese products are superior, the originality of most Japanese products sold overseas came from Europe and the United States, and Japan has merely partially improved the products.

In this sense, President de Gaulle's remark symbolized the image of Japan and the Japanese people in Europe.

Put bluntly, if you ask the question "Which nationality has more respect, Japanese or Chinese?" in European countries, the answer is definitely Chinese. Even though China is not yet able to produce the latest industrial goods, its unique culture created throughout its long history is widely recognized in Europe, engendering respect for China and Chinese people.

It would be a different story if Japan did not have a rich culture. Of course, it cannot be compared to China's 4,000-year history, but Japan does have a culture of which we can be justly proud. Every year I hold a Japanese book fair and cultural festival mainly through the Tokai University European Center in Copenhagen, and many Danish government officials and citizens attend these events. And each one of them always shows a strong interest in Japanese culture and learns more about Japan. Also, five years ago, with the cooperation of the president of Suntory, Mr. Saji, we

held an exhibition of Japanese traditional crafts at the Pushkin Museum of Fine Arts in Moscow. I will never forget the amazed expressions on most of the hundreds of thousands of visitors to the exhibition when they saw the delicate beauty of Japanese traditional crafts. I have no doubt that those people who attended these events recognized that Japan has excellent art and a highly established culture which are uniquely Japanese, in addition to Japan being a powerful economic nation.

It is often pointed out nowadays that the budget allocated by the Japanese government for international cultural exchanges and foreign student exchanges is astonishingly small compared to other advanced nations in the West. It is no surprise that we cannot improve the image of Japan overseas and that they do not come to respect the Japanese people.

I should explain the benefits that advanced Western nations offer to foreigners who are interested in studying their languages and affairs. Many Japanese have received various benefits from the Fulbright scholarship of the United States, Ebert Stiftung of West Germany, and Athénée Français of France, and have studied abroad. In comparison, what has Japan done? If you think about it, it is highly embarrassing.

On a separate note, the Matsumae International Foundation which I founded last year is only a small private organization, but it invites foreign researchers studying Japan to visit our country and provides scholarships to assist disadvantaged researchers of Japan in developing countries, as a way of returning the benefits that Japan has received from developed Western nations in the past.

Unless we actively encourage cultural and foreign student exchanges and try to improve current understanding of Japanese tradition and culture, international criticism of the economic powerhouse that is Japan will continue to escalate. Japan is thus trapped in a difficult situation, and we must take firm action now.

How should we introduce Japanese culture to the world? How can we deepen understanding and respect for Japan through its culture? I believe Judo can serve as the core of all this.

Of course, we can hold exhibitions of Japan's successful traditional crafts and arts in foreign countries. As I pointed out, it is also important to promote interaction with foreign students and researchers. However, these are time-consuming tasks and it is impossible to hold art exhibitions constantly. If you take a step back from this limited scope and broaden your perspective, you realize that Judo, a cultural product created in Japan, has actually been spreading around the world, attracting people, becoming popular, and increasing even today the number of people who practice the sport, without any support from the Japanese government.

There are few Western cities without a Judo dojo. If you look inside a sports club in a small town, you will almost always find a Judo and Karate club, and either an enthusiastic Japanese coach, or a foreign coach taught by a Japanese coach, who is dedicated to instructing many people. And they are enjoying the sport created by Japanese people, in Judo uniform, in the language of our country.

These people are not simply moving their bodies, but are also developing an affinity toward Japan and an understanding of the Japanese spirit through Judo, which will eventually lead to friendship with Japan.

The reason why so many people around the world love and take to Judo is because the sport embodies the originality of Japan and they have discovered irreplaceable value within it.

I chose to run for the president of the International Judo Federation so that I can promote understanding of Japanese culture, change Japan's image, and create a new vision of Japan by helping to spread Judo, the sport which is already loved and practiced by people around the world. I did not make this decision suddenly. I decided to run for the position as part of my 15-year work on international cultural exchanges that I remain committed to, and it may possibly be my last job.

It is premature to entrust the mission of the globalization of Judo, the sport that originates in Japanese culture, to the hands of foreigners. Japan still has many things to achieve in this area, and we should

request greater support from the Japanese government in future. For example, among nations, there are countries like France, Denmark and the Soviet Union that have fully equipped dojo and coaches under the protection of a sports committee of the government or city, and free participation by citizens is guaranteed. But in many countries, there are still not enough dojo or facilities, and they do not have strong coaches. There is a general lack of textbooks, and there are only a few good ones. This is because it is fundamentally difficult to translate Judo instruction books which were written in Japanese.

Japan must make a greater effort to make up for these deficiencies.

Japan can help build dojo in foreign countries. In certain cases, Japan can offer substantial financial aid. Competition in automobiles or transistors will only lead to suspicion from other nations. Anti-Japan sentiment, not only from governments, but also from labor unions has been mounting due to concerns that Japanese industries will put pressure on their employment. In contrast, the spread of Judo as a sport will be appreciated rather than criticized. If Judo can build up one's body and provide health benefits, lead people around the world to understand Japan, and build a sense of affinity, it will serve two purposes.

Japan has to combine private- and public-sector strength in trying to spread Judo in the world and for this purpose I believe a Japanese person needs to serve as president of the International Judo Federation for the time being.

In future, when a number of Judo and Karate dojo have been built around the world, Judo introductory books and textbooks have been published in many different languages, instructor training has been launched to spread the sport, and Judo has become established as a world sport, then at that point I think the International Judo Federation is ready to be led by a person from another country.

Unfortunately, the fact that Japan has lost the presidency of the International Judo Federation means that Japan has stopped leading the international Judo world.

In order to strongly promote the task I have just described, it is essential to return the post to the hands of the Japanese people.

Last year, I celebrated my 77<sup>th</sup> birthday. Since I was 15, I have been passionately in love with Judo for more than 60 years. I have decided to dedicate the rest of my life to Judo. Through the position, I intend to open a positive future for Japan through the sport, thus contributing to world peace from the perspective of international exchanges through sport.

Judo is a most peaceful and courteous sport, and embodies the essence of the Japanese spirit. I would like to convey this spirit to the world.

## Vers le triptyque « Judo – Fraternité – Paix »

### Construire le futur à travers le sport et transmettre ses valeurs supérieures

Président : YAMASHITA Yasuhiro

« Judo – Fraternité – Paix », tel est le slogan de l'Association NPO-Solidarity of International Judo Education. Ce triptyque a le sens suivant : améliorer l'esprit, les techniques et le corps par des entraînements de judo dans un esprit d'entraide et d'encouragement afin de créer des liens de confiance permettant des amitiés fortes, et contribuer ainsi à l'éducation d'hommes et de femmes devant être les socles d'un monde prospère et pacifique. De par ma position de pratiquant, d'instructeur et de directeur de la Fédération Internationale de Judo (IJF) ayant parcouru le monde pour faire connaître le judo, je comprends parfaitement les attraits et les enjeux de ce sport. J'apprécie et je respecte également les valeurs de « *Seiryoku Zenyo* » (Le meilleur emploi de l'énergie) et de « *Jita Kyoei* » (Entraide et prospérité mutuelle) diffusées par Maître KANO Jigoro, fondateur du Kodokan Judo, et celles proposées par le baron Pierre de COUBERTIN dans son esprit olympique.

Si on me demande pourquoi je fais du judo, je répondrais sans doute en citant ces valeurs. L'esprit du judo, comme l'esprit olympique, de même que le slogan de notre Association contiennent le même message : l'entente mutuelle entre les hommes à travers le sport au service de la paix mondiale. L'objectif ultime du sport n'est pas de devenir le plus fort. Le véritable but est de trouver l'équilibre du corps et de l'esprit à travers l'entraide afin que chacun devienne capable de contribuer à la création et au maintien d'une société pacifique.

Il y a 4 ans, j'ai créé l'Association NPO-Solidarity of International Judo Education, avec l'aide de nombreux soutiens. Je désire contribuer au renforcement des fonctions citoyennes du judo tout en participant à sa diffusion au niveau international. Les trois principaux aspects de ces activités peuvent être résumés par les trois points suivants : « diffusion internationale du judo », « échanges culturels et compréhension transculturelle par l'intermédiaire du judo » et « éducation des jeunes par le judo ». Le slogan de l'Association, « Judo – Fraternité – Paix » englobe toutes ces

notions.

Ce slogan, ce n'est pas moi qui l'ai inventé. Il s'agit du slogan adopté par Maître MATSUMAE Shigeyoshi, le très respecté fondateur de l'Université Tōkai, lorsqu'il était président de l'IJF (de 1979 à 1987). Je n'ai fait que le reprendre tel quel. Je me suis bien sûr également promis de reprendre l'esprit qui accompagne ces mots. Maître MATSUMAE Shigeyoshi a vécu à travers le 20<sup>ème</sup> siècle, siècle des révolutions s'il en est, en passant par plusieurs carrières, scientifique, haut fonctionnaire, professeur, homme politique, activiste international et budoka. Moi qui aie eu l'insigne honneur de le fréquenter, je peux affirmer que toute sa philosophie et toutes ses actions étaient guidées par la volonté de « construire un monde pacifique dans lequel les esprits de tous les hommes seraient liés ». Il s'était porté candidat au poste de président de l'IJF malgré son âge pour réaliser cette volonté. Nous avons commémoré l'an dernier l'anniversaire de sa prise de poste il y a 30 ans (en décembre 1979) et, à ce moment-là, nous avons eu l'occasion de consulter un document nous renseignant sur les raisons qui l'avaient poussé à se porter candidat. Ce texte intitulé « A propos de ma candidature à la présidence de la Fédération Internationale de Judo » qui avait été enregistré par la secrétaire du Maître, Mme KANEHIRO Noriko, fut rendu public pour la première fois. Il m'a profondément touché et m'a immédiatement évoqué les paroles que le Maître aimait à me dire de son vivant :

« Je ne te soutiens pas dans ta pratique du judo pour que tu deviennes simplement plus fort et que tu gagnes. Je te soutiens pour que tu comprennes l'esprit du judo et que tu deviennes un homme de générosité. Je veux que tu t'impliques dans le monde et que tu deviennes un membre dynamique de la société ». J'entends encore le son de la voix du Maître qui me donnait force et courage à travers ces lignes.

« Judo – Fraternité – Paix », ce slogan puise sa source dans la pensée de Maître MATSUMAE Shigeyoshi, tout

comme les orientations et les lignes directrices de l'Association NPO-Solidarity of International Judo Education.

J'espère que tous ceux qui s'accordent avec la pensée de l'Association et qui militent en sa faveur liront ce texte, « A propos de ma candidature à la présidence de la Fédération Internationale de Judo », dont la valeur mérite publication et qu'à travers cette lecture le cercle de nos activités s'en trouve agrandi.

**À propos de ma candidature à la  
présidence de la Fédération  
Internationale de Judo**

Avril 1979

**Shigeyoshi Matsumae**

En décembre de l'an dernier, au moment où l'annonce de ma candidature à la présidence de la Fédération Internationale de Judo (International Judo Federation, IJF) a été rendue publique par les journaux, la réaction dont j'ai alors pris connaissance était celle d'une surprise concernant le fait que le Président en exercice n'était pas japonais. Comment le Président de l'organisation internationale qui chapeautait le judo, sport né au Japon, sélectionné comme sport olympique et qui avait connu une expansion mondiale pouvait ne pas être japonais ? Voilà quelque chose que les gens qui n'étaient pas directement liés au judo éprouvaient des difficultés à croire. En fait, la présidence de l'IJF n'est plus, depuis quatorze ans, occupée par un Japonais mais par le Britannique M. Palmer.

Ma décision de me porter candidat à cette position n'est cependant pas liée à un nationalisme étroit visant à rendre au Japon la direction de ce sport mondial né dans ce pays. Je pense qu'il convient, dans un sens, de se réjouir de voir l'accès d'un étranger à la présidence de ce sport d'origine japonaise et qui a connu une expansion mondiale, car cela constitue une preuve de sa reconnaissance universelle. Cependant, si je me suis porté candidat à ce poste, c'est que je pense que le Japon, pays qui a mis au monde ce sport qui est devenu, par la suite, mondial, ne peut se passer de jouer un rôle actif en faveur de son expansion future. En effet, alors que le Japon fait l'objet de critiques de la part de la communauté internationale en raison de sa montée en puissance due à son renforcement militaire et à son expansion économique, je pense qu'il est absolument nécessaire de faire mieux connaître notre pays et de le faire progresser de façon pacifique et cordiale.

Depuis dix ans, en tant que Président de l'Université Tōkai, ainsi qu'en tant que Président de la Japan Cultural Association qui m'a vu m'occuper de coopération académique et culturelle dans le monde entier, j'ai visité un grand nombre de pays à travers le monde. J'ai alors pu prendre conscience avec acuité de deux faits. Tout d'abord, le Japon est très mal connu dans le monde et son image, qui souffre de nombreux malentendus, est particulièrement mauvaise. Par contre, et c'est mon deuxième point, les sports nés au Japon, en particulier le judo et le karaté, connaissent à la fois un développement international tout à fait stupéfiant et une très grande popularité à travers le monde.

Autrefois, le Président français Charles de Gaulle a qualifié le Premier ministre japonais de « marchand de transistors ». Il est certain que la forte croissance économique que connaît le Japon est reconnue dans le monde entier et que l'image des produits japonais est passée peu à peu de celle de breloques bon marché à celle d'articles de haute qualité. Néanmoins, il est malheureusement impossible de dire que l'amélioration de la qualité des produits industriels japonais a été à l'origine d'un nouveau respect envers le Japon et les Japonais. La raison est à trouver dans ce que, si les produits japonais sont d'excellente qualité, la plus grande partie des produits commercialisés dans le monde trouvent leur origine dans les pays occidentaux, tandis que les Japonais ne font qu'en améliorer la qualité de façon partielle.

L'on peut donc dire que la déclaration du Général de Gaulle reflète la vision qu'ont les Européens du Japon et des Japonais.

Pour parler franchement, si l'on se demande si le respect des Européens se porte vers les Japonais ou les Chinois, l'on peut répondre, sans la moindre hésitation, que c'est vers ces derniers. Même si la Chine ne possède pas les capacités de produire des biens industriels avancés, la culture chinoise, dont l'originalité a été bâtie par son histoire, est largement connue en Europe, ce qui est à l'origine d'un profond respect à l'encontre de la Chine et des Chinois.

Bien entendu, cela ne vaudrait pas la peine d'en parler si le Japon ne possédait pas une brillante culture. Cependant, même si elle ne peut rivaliser avec les quatre mille ans d'histoire que possède la culture chinoise, le Japon possède lui aussi une culture dont il peut s'enorgueillir. Chaque année,

je participe, en m'appuyant sur le Centre européen de l'Université Tōkai établi à Copenhague, à la préparation d'exposition de livres et de manifestations culturelles. Les autorités et les citoyens danois nous font l'honneur de venir nombreux participer à ces événements, de montrer un fort intérêt pour la culture japonaise et de faire preuve d'une compréhension croissante envers le Japon. Nous avons également, il y a cinq ans, grâce à la collaboration de Monsieur Saji, PDG de l'entreprise Suntory, organisé une exposition d'arts traditionnels japonais au Musée Pushkin de Moscou. Il m'est impossible d'oublier les regards émerveillés de la plupart des 100 000 visiteurs lorsqu'ils contemplaient la finesse des objets d'art exposés. Il ne fait aucun doute que les visiteurs de ces différentes manifestations n'ont alors pas uniquement vu dans le Japon une puissance économique, mais également un pays possédant des arts et une culture de très haute tenue et qui plus est, originale.

C'est quelque chose sur quoi l'on a récemment attiré l'attention, mais les sommes que le gouvernement japonais consacre à la coopération culturelle à l'étranger, ainsi qu'aux échanges d'étudiants sont remarquablement faibles si on les compare à ce que dépensent les pays occidentaux les plus avancés. Il va alors de soi que l'image du Japon à l'étranger ne peut s'améliorer et que le respect dont bénéficient les Japonais ne peut s'approfondir.

Il faut notamment insister sur les facilités accordées par les pays occidentaux les plus avancés aux étrangers qui effectuent des recherches sur leur langue et leur pays. Lorsque l'on pense aux nombreux Japonais qui ont bénéficié des bourses d'études à l'étranger comme celles du programme Fulbright des Etats-Unis, de la Friedrich-Ebert Stiftung de l'Allemagne de l'Ouest, ou encore de l'Athénée français, l'on ne peut qu'avoir honte du peu d'efforts effectués par notre pays en comparaison.

Je vais faire une digression, mais la fondation que j'ai lancée l'an dernier, la Matsumae International Foundation, bien qu'elle ne possède que les moyens forcément limités qui sont ceux du secteur privé, en invitant des spécialistes étrangers du Japon et en leur offrant des bourses d'études, a pour but de rendre aux pays avancés d'Occident ce que ceux-ci ont donné au Japon, ainsi que d'offrir des facilités aux chercheurs des pays en voie de développement qui désirent effectuer des recherches sur le Japon et qui ont été,

jusqu'ici, peu favorisés.

Quoi qu'il en soit, à moins de promouvoir activement les échanges culturels et les échanges d'étudiants et, ainsi, de faire mieux connaître les traditions et la culture propre à notre pays, les critiques internationales à l'encontre du Japon puissance économique vont s'intensifier et la situation ne pourra connaître d'amélioration. Le Japon est au pied du mur et il est donc primordial d'agir dans cette direction dès maintenant.

Comment agir donc pour faire connaître la culture japonaise à l'étranger ? Et comment approfondir la compréhension et le respect envers le Japon au travers de la culture ?

Je suis convaincu que c'est le judo qui doit jouer ici le rôle central.

Bien entendu, puisqu'elles ont connu le succès dans le passé, nous pouvons continuer à organiser des expositions d'arts traditionnels et de beaux-arts à l'étranger. Comme je l'ai indiqué précédemment, il est important de mettre en place des échanges d'étudiants et de chercheurs. Cependant, mener de telles actions réclame du temps et il est probablement impossible d'organiser constamment des expositions artistiques. Néanmoins, si l'on essaie d'élargir son champ de vision, l'on peut voir que le judo, produit culturel véritable que le Japon a mis au jour, bien que ne bénéficiant pas du concours du gouvernement japonais, a connu une expansion mondiale et est apprécié par une population de pratiquants en augmentation constante.

Il est rare de voir une cité occidentale où ne se trouve pas un dojo de judo. Si l'on regarde les clubs sportifs des petites villes, on voit des clubs de judo et de karaté qui fleurissent et où des professeurs japonais enthousiastes, ou bien leurs disciples non-japonais, enseignent à de nombreux élèves. En outre, tous pratiquent ces sports japonais en portant une tenue japonaise et en recourant à la langue japonaise.

Ces personnes ne font d'ailleurs pas que pratiquer un exercice physique : se sentant dans un rapport de proximité avec le Japon, elles parviennent, par la pratique du judo, à une certaine compréhension de l'esprit japonais et nourrissent un sentiment amical à l'égard du Japon.

Si les gens du monde entier aiment et s'approprient le judo, c'est qu'il s'agit d'un sport représentatif de ce qui fait

l'originalité de la culture japonaise et qu'ils font, en le pratiquant, une découverte d'une valeur irremplaçable.

Si je me suis porté candidat à la présidence de l'IJF, c'est afin de faire connaître la culture japonaise dans le monde, de changer l'image du Japon et de permettre l'essor d'une nouvelle image du Japon grâce à une plus grande expansion du judo, sport aimé par des gens sur l'ensemble de la planète. Mais je ne me suis pas décidé à cette candidature sur un coup de tête. Celle-ci constitue l'aboutissement de quinze ans de réflexion et d'action dans le domaine des échanges culturels. Je me suis également engagé dans cette candidature en pensant qu'il s'agirait de la dernière étape de ma carrière.

Laisser aujourd'hui la tâche d'internationaliser le judo, qui possède une originalité culturelle japonaise certaine, à des étrangers serait prématuré. Le Japon a encore un rôle important à jouer au sein de ce processus. C'est pour cela qu'il conviendrait de demander au gouvernement japonais de nous aider. Par exemple, si l'on observe la situation dans le monde, s'il existe certains pays, tels la France, le Danemark, ou encore l'URSS qui possèdent un nombre satisfaisant de dojos et d'enseignants sous la tutelle des autorités sportives nationales et municipales et où les citoyens peuvent pratiquer en toute liberté, il existe de nombreux autres pays où les dojos et les équipements font défaut et où les professeurs qualifiés manquent. Alors que les manuels sont trop peu nombreux, les bons manuels sont encore plus rares. Cela est dû à la difficulté de les traduire depuis le japonais.

Le Japon doit redoubler d'efforts pour surmonter ces insuffisances.

Nous aiderons à la mise en place de dojos dans chaque pays. Dans certains cas, nous n'hésiterons pas à apporter une aide financière conséquente. Une concurrence sur le terrain de l'automobile ou des transistors produit de la défiance. Cette dernière ne provient pas seulement des gouvernements, mais également des syndicats de travailleurs qui réagissent face à la pression sur l'emploi qu'exerce l'industrie japonaise. Mais l'expansion du judo ne peut faire l'objet de critique, ce sport étant une source de joie. En contribuant à la bonne santé par l'édification des corps et, dans le même temps, en apportant une plus grande proximité et une plus grande compréhension du monde envers le Japon, ne faisons-nous pas d'une pierre deux coups ?

Au Japon, autorités et population doivent donc travailler de concert pour l'expansion internationale du judo, et c'est pour cela qu'un Japonais doit aujourd'hui être à la tête de l'IJF.

Je pense que le jour où un grand nombre de dojos de judo et de karaté auront été construits dans le monde, où des livres de présentation et des manuels sur le judo auront été publiés dans un grand nombre de langues, où une formation des professeurs visant à l'expansion du judo aura été mise en place et où le judo sera devenu un sport véritablement universel, le Président de l'IJF pourra alors être un non japonais.

Il est regrettable de constater que la perte de la présidence de l'IJF a également signifié l'abandon par le Japon de la direction du judo au niveau mondial.

Il est donc nécessaire qu'un Japonais récupère cette position afin d'effectuer les tâches que j'ai exposées tout à l'heure.

J'ai fêté, l'an dernier, mon soixante-dix-septième anniversaire. J'ai décidé de consacrer mes dernières années au judo, que j'aime passionnément depuis l'âge de quinze ans, soit depuis plus de soixante ans. J'aimerais que, grâce au judo, le Japon puisse connaître un avenir radieux. Je suis certain que cet engagement contribuera à la paix universelle grâce au développement des échanges sportifs à travers le monde.

Le judo est un sport qui, non seulement est le plus pacifique qui soit, mais qui accorde également la plus grande importance au respect d'autrui. À cet égard, l'on peut dire qu'il constitue, en quelque sorte, une cristallisation de l'esprit japonais. Ce que je désire, c'est œuvrer à la diffusion de cet esprit.



## **С девизом «Дзюдо, товарищество, гармония!»**

**Проложим дорогу в будущее через спорт, опираясь на духовное наследие**

**Генеральный директор , Ясухио Ямасита**

Девиз некоммерческой организации «Солидарность международного обучения дзюдо» - это «Дзюдо, товарищество, гармония!». Его значение в том, что на занятиях по единоборству дзюдо мы оказываем друг другу поддержку, укрепляя свой дух, физическую форму и совершенствуя технику борьбы, создаем в этом процессе доверие и крепкую дружбу и стремимся сделать свой вклад в построение более гармоничного и процветающего общества. Как дзюдоист, тренер и президент Международной федерации дзюдо из собственного опыта работы по продвижению дзюдо в мире я хорошо осознаю притягательную силу дзюдо как спорта и связанные с ним вызовы. Одновременно с этим, я полностью поддерживаю принципы, провозглашенные основателем Кодокан Дзю-до, Гранд-мастером Дзигоро Кано, то есть «Наиболее результативное использование силы» и «Взаимное благоденствие», а также дух олимпизма, который пропагандировал Пьер де Кубертен.

Если бы меня спросили: «Зачем продолжать заниматься дзюдо?» - в ответ я, пожалуй, сказал бы такие слова. Дух дзюдо, как и дух олимпизма, а также девиз нашей некоммерческой организации «Солидарность» подчеркивают вклад в построение мира во всем мире через спорт, способствующий созданию взаимопонимания. Конечная цель спорта не есть создание самого сильного бойца. Его цель добиться равновесия между телом и духом и в сотрудничестве друг с другом способствовать построению благоденствия в обществе.

Четыре года назад при помощи и поддержке многих людей я основал некоммерческую организацию «Солидарность международного обучения дзюдо». Я хотел, чтобы эта организация служила делу продвижения дзюдо в мире, выполняя одновременно и общественную миссию. Тремя столпами, на которые

опирается наша организация, является «Продвижение дзюдо в мире», «Культурный обмен и межкультурное взаимопонимание через дзюдо» и «Воспитание подрастающего поколения через дзюдо». В качестве девиза нашей организации я выбрал слова «Дзюдо, товарищество, гармония!».

Этот девиз придумал не я. Открою вам секрет: его придумал в годы своего председательства в Международной федерации дзюдо (1979-1987) многоуважаемый Сигэёси Мацумаэ, основатель Университета Токай. Я заимствовал этот девиз дословно. Разумеется, я принял это решение не только из-за его формулировки, а потому что считал необходимым отразить преемственность духовного наследия. Сигэёси Мацумаэ был инженером, государственным служащим, педагогом, политиком, международным деятелем, а также мастером единоборств, который вел активную жизнь в беспокойный 20 век. Мне выпала честь лично с ним познакомиться, и я знаю, что все его мысли и поступки были пронизаны верой в принцип «Построения благоденствующего общества через единение людей во всем мире». Можно сказать, что выдвижение его кандидатуры на должность Председателя Международной федерации дзюдо, несмотря на его преклонный возраст стало свидетельством его приверженности этой цели. В прошлом году проходила встреча, посвященная ретроспективе вступления Мацумаэ в должность Председателя Международной федерации дзюдо 30 лет назад, в декабре 1979 года, и в связи с этим у меня возникла возможность ознакомиться с материалами, в которых были описаны переживания, связанные с решением о выдвижении его кандидатуры. Этот документ, записанный секретарем Норико Канехиро, публикуется впервые. При прочтении текста документа

«По случаю выдвижения моей кандидатуры на пост Председателя Международной федерации дзюдо» я был тронут до глубины души и вспомнил то, что Сигэёси Мацумаэ часто говорил мне при жизни.

«Я помогаю Вам, Ямасита-кун, не только потому, что хочу, чтобы Вы стали сильным борцом и победили. Я хочу, чтобы Вы поняли дух дзюдо и возвысили себя как человек. Хочу, чтобы Вы стали человеком, который служит миру и действует ему на благо». Читая документ, я как будто слышал обращенный ко мне низкий голос учителя Мацумаэ, то порицающий, то ободряющий меня.

Девиз «Дзюдо, товарищество, гармония!» - это принцип, в который верил Сигэёси Мацумаэ. Он отражает идеалы и основы поведения, провозглашенные некоммерческой организацией «Солидарность международного обучения дзюдо».

Мне хотелось бы предложить всем присутствующим здесь участникам, оказывающим поддержку в деятельности нашей организации и верящим в ее предназначение, ознакомиться с текстом документа «По случаю выдвижения моей кандидатуры на пост Председателя Международной федерации дзюдо», который опубликован в данных материалах. Я надеюсь, что это позволит нам еще более расширить круг людей, принимающих участие в нашей деятельности.

**Почему я выдвигаю свою кандидатуру  
на пост президента Международной  
федерации дзюдо**

Апрель 1979 г.

**МАЦУМАЭ Сигэёси**

Когда в декабре прошлого года мое решение о выдвижении своей кандидатуры на пост президента Международной федерации дзюдо было опубликовано в газетах, первой реакцией оказалось удивление людей, впервые узнавших, что данный пост занимает не японец. Людям, не имеющим непосредственного отношения к дзюдо, было трудно поверить, что глава международной организации по дзюдо - виду спорта, созданному в Японии и распространенному во всем мире, вплоть до включения его в программу Олимпийских игр, не является японцем. Дело в том, что последние 14 лет на посту президента Международной федерации дзюдо находился не японец, а англичанин - г-н Палмер.

Мое решение выдвинуть свою кандидатуру на этот пост, однако, мотивировано не желанием вернуть на родину пост главы организации по созданному в Японии мировому виду спорта. Я отнюдь не сторонник подобного узколобого патриотизма. Если пост главы международной организации по какому-то традиционному в той или иной стране виду спорта занят иностранцем, это означает его всемирное признание и приобретение им международного статуса. Этому может радоваться народ страны, создавшей данный вид спорта. Тем не менее, я решил баллотироваться на этот пост. Почему? Потому что я считаю, что, во-первых, для дальнейшей интернационализации дзюдо требуются всевозможные усилия со стороны являющейся его родиной Японии, и, во-вторых, такие усилия необходимы для углубления понимания Японии другими странами и повышения статуса Японии в мировом сообществе не путем усиления военного и экономического потенциала, за что

мы подвергаемся критике со стороны многих стран мира, а путем укрепления мирных и дружественных отношений.

За последние 10 лет я, будучи ректором Университета Токай и президентом Японской культурной ассоциации (организации, занимающейся научным и культурным обменом с зарубежными странами), посещал многие страны мира, как западные, так и социалистические. В ходе этой деятельности мне пришлось признать два факта: во-первых, уровень понимания Японии в зарубежных странах очень низкий, более того, в отношении Японии существует немало заблуждений, из-за чего Япония получает очень низкую оценку в этих странах; во-вторых, несмотря на данные обстоятельства, такие традиционные японские виды спорта, как дзюдо и каратэ, широко распространяются и пользуются популярностью во многих странах.

Хорошо известен тот факт, что когда-то президент Франции де Голль назвал премьер-министра Японии «торговцем транзисторов». Действительно, резкий рост японской экономики высоко оценивается многими странами мира, и слова «сделано в Японии» уже перестают означать дешевые и низкокачественные товары. Если спросить, однако, вызывает ли высокое качество промышленных товаров уважение к Японии и ее народу среди иностранцев, ответ, к сожалению, будет отрицательным. Это обусловлено тем, что большинство пользующихся спросом на мировом рынке высококачественных японских товаров было разработано в странах Европы или США, а вклад японцев ограничивается в их частичном усовершенствовании.

В этом смысле вышеуказанные слова президента де Голля можно считать символическим отражением взгляда европейцев на Японию и японцев.

Откровенно говоря, в европейских странах китайцы пользуются гораздо большим уважением, чем японцы, так как европейцы хорошо понимают, что китайцы, несмотря на отсутствие возможности производить современные промышленные изделия в настоящее время, являются обладателями оригинальной культуры, сформировавшейся на протяжении многолетней истории. Именно такая культура вызывает уважение к

Китаю и китайцам.

Мне не о чем было бы говорить в случае отсутствия достойной уважения культуры в Японии. Однако и у нас есть культура, которой мы можем гордиться перед всем миром, хотя, конечно, ее нельзя ставить наравне с китайской культурой, имеющей 4000-летнюю историю. Так, например, я ежегодно организую выставки японских книг и культурные фестивали на базе Европейского центра Университета Токай, расположенного в Копенгагене. Эти мероприятия привлекают множество посетителей, как представителей правительства Дании, так и простых граждан. Все они проявляют значительный интерес к японской культуре и углубляют свое понимание Японии. Кроме того, 5 лет назад, при поддержке президента фирмы «Сантори» г-на Садзи мы проводили выставку традиционного прикладного искусства Японии в Музее изобразительного искусства имени А.С.Пушкина в Москве. В моей памяти до сих пор живы взгляды ста тысяч посетителей, полные удивления утонченностью красоты изделий японского прикладного искусства. Я уверен, что все посетители этих мероприятий смогли осознать, что Япония – это не только экономическая держава, но и страна с уникальным искусством и высокой и оригинальной культурой в широком смысле этого слова.

Лишь в последнее время стало отмечаться, что правительство Японии выделяет на программы культурного обмена и обмена студентами с зарубежными странами существенно меньше средств по сравнению с развитыми странами Европы и США. Стоит ли удивляться, что в мировом сообществе представление о Японии не улучшается, и к японцам не относятся с достаточным уважением?

Следует обращать внимание на то, как развитые западные страны активно оказывают поддержку иностранцам, изучающим язык, культуру и другие аспекты этих стран. Например, множество японских ученых и студентов учились и учатся за рубежом благодаря программам Фулбрайта (США) и фонду Эберга (ФРГ), а также институту «Агене Франсез». Нам станет стыдно, если подумать о мизерности аналогичной поддержки, оказываемой Японией.

Позвольте мне сделать отступление на данную тему. В прошлом году я создал «Международный фонд Мацумаэ». Возможности данного фонда - скромного частного учреждения, несомненно, ограничены. Однако с его помощью я хотел бы отблагодарить за содействие, получаемое японцами от развитых западных стран, и оказать поддержку ученым в развивающихся странах, изучающим японскую культуру в условиях дефицита всего необходимого, приглашая их в Японию и предоставляя им стипендии.

Во всяком случае, критика в отношении Японии как экономической державы не только не утихнет, но даже усилится, если мы не станем активно осуществлять программы культурного и образовательного обмена, способствующие пониманию мировым сообществом японских традиций и действительного состояния японской культуры. Иными словами, Япония находится в тупике, для выхода из которого необходимо принимать активные меры.

Далее у нас возникает вопрос: каким образом ознакомить иностранцев с японской культурой, как можно углубить понимание Японии и вызвать уважение к ней?

Мой ответ – через дзюдо.

Проведение выставок японского традиционного прикладного искусства и изобразительного искусства, вне всякого сомнения, нельзя назвать нецелесообразным. Подобные мероприятия имели определенный успех в прошлом. Кроме того, как отмечалось выше, определенную роль может сыграть обмен учеными и студентами. Однако такие мероприятия требуют много времени, к тому же проводить выставки на постоянной основе невозможно. Но если мы попробуем выйти за такие узкокультурные рамки и расширим поле зрения, можно сразу заметить, что дзюдо - продукт культуры в широком смысле этого слова - распространяется по всему миру и завоевывает популярность среди многих народов без каких-либо усилий со стороны японского государства. Число людей, занимающихся дзюдо, растет с каждым днем.

В США и странах Европы трудно найти город, где нет тренировочного зала дзюдо. В спортивном центре маленького города обязательно есть клубы дзюдо и

каратэ, где под руководством усердного японского тренера или местного тренера, прошедшего курс обучения у японского мастера, множество людей совершенствуют свое мастерство в данных видах спорта. При этом они носят японскую форму для дзюдо и употребляют в разговоре японские термины.

Важно то, что они не только учатся умело владеть своим телом, но и развивают в себе симпатию к Японии, углубляют свое понимание Японии через дзюдо, а также укрепляют дружественные отношения между своей страной и Японией.

Люди во всем мире любят дзюдо и занимаются им потому, что они видят в дзюдо оригинальную культуру Японии, содержащую подлинные ценности.

Я баллотируюсь на пост президента Международной федерации дзюдо для того, чтобы способствовать пониманию японской культуры мировым сообществом, изменять к лучшему имидж Японии и создавать новый образ Японии через дальнейшее распространение дзюдо, которое уже пользуется любовью и симпатией у народов всего мира. Это не поспешное, а хорошо обдуманное решение. За последние 15 лет я много размышлял о международном культурном обмене, а также занимался практической деятельностью в этой сфере. Выдвижение кандидатуры на этот пост объясняется моим желанием продолжать деятельность в данной области, причем, по всей вероятности, такая работа станет моим последним вкладом в это доброе дело.

По-моему, еще рано поручать иностранцам руководящую роль в деле распространения дзюдо, культурные корни которого берут начало в Японии. В этой сфере многое предстоит делать самим японцам. Думаю, что мы должны требовать от правительства Японии оказания более активной поддержки в распространении дзюдо. За исключением немногих стран, таких как Франция, Дания и СССР, где под покровительством государственных или муниципальных спортивных комитетов оборудованы тренировочные залы, обучены тренеры, и гражданам обеспечена возможность заниматься дзюдо, в большинстве стран мира не хватает ни залов, ни экипировки, ни квалифицированных тренеров.

Учебников мало, и их качество оставляет желать лучшего. Это неудивительно, если учесть сложности перевода учебников по дзюдо, написанных на японском языке с применением специальных терминов.

Японии необходимо прилагать больше усилий для разрешения этих проблем.

Помощь может принимать различные формы: содействие в открытии тренировочных залов в разных странах, или, в отдельных случаях, непосредственное оказание существенной финансовой помощи. Успехи в области автомобилестроения и производстве транзисторов вызывают опасения в конкурирующих странах - не только у правительств этих стран, но и у профсоюзов, опасющихся сокращения рабочих мест. Однако усилия по распространению дзюдо как вида спорта будут встречаться не с опасением, а исключительно с радостью. Дзюдо закаляет тело, укрепляет здоровье и одновременно способствует возникновению симпатии и понимания в отношении Японии у народов мира. Иными словами, распространяя дзюдо, мы можем одним ударом убить двух зайцев.

Японии, следует внедрять дзюдо-дипломатию, объединяя для этого силы государственного и частного секторов. Именно поэтому на данном этапе пост Международной федерации дзюдо должен занимать японец.

В будущем, когда во многих странах мира будут созданы тренировочные залы дзюдо и каратэ, опубликованы учебники дзюдо на разных языках, налажена система подготовки тренеров, иными словами, когда позиция дзюдо как мирового вида спорта будет укреплена более надежно, чем сейчас, на посту президента Международной федерации дзюдо может находиться человек любой национальности.

Потеряв пост Международной федерации дзюдо, японцы, к сожалению, лишили себя роли лидера в дзюдо на мировой арене.

Для активного выполнения вышеуказанных мероприятий прежде всего необходимо вернуть этот пост нам, японцам.

В прошлом году я отметил свой 77-летний юбилей. В эту памятную дату я твердо решил посвятить свою

оставшуюся жизнь дзюдо – виду спорта, которым я начал заниматься с 15 лет, и который я страстно люблю в течение более 60 лет, а также деятельности по обеспечению светлого будущего Японии с его помощью. Уверен, что мероприятия по развитию народного обмена через призму спорта смогут внести вклад и в укрепление мира.

Дзюдо – это один из самых миролюбивых видов спорта, в котором особое значение придается вежливости. Его можно назвать квинтэссенцией духа японской культуры. Я вижу свое предназначение в распространении духа японской культуры по всему миру.

**Con la mira puesta en la realización del lema “Judo / Amistad / Paz”,**

**herederos y continuadores de un noble espíritu, construyamos el futuro a través del deporte.**

**Presidente de la Junta Directiva  
Yasuhiro Yamashita**

El lema de la ONL (Organización No Lucrativa) “Judo, Educación y Solidaridad” es: “Judo / Amistad / Paz”. El significado de este enunciado es que a través del entrenamiento en Judo, una competición con compañeros en el mismo empeño, se persigue el progreso espiritual, técnico y físico de cada persona dentro de un ambiente de sana emulación y estimulación mutua, que fomente la confianza mutua y una fuerte amistad, para así formar personas capaces de construir una sociedad en la que abunde la paz. En mi caso, como practicante y competidor de Judo, como instructor de este deporte, y más todavía, si cabe, como miembro de la Junta Directiva de la Federación Internacional de Judo, a través de mi experiencia en la dedicación a la propagación del Judo por todo el mundo, soy consciente del atractivo del Judo como deporte y de los temas que plantea a cada persona que se acerca a él. Y por otra parte me identifico plenamente tanto con los ideales promovidos por Jigoro Kano, Maestro fundador del Kodokan (Escuela para el Estudio de la Vía) de Judo en su lema: “Sabio uso de la energía física y espiritual, a fin de lograr bienestar y beneficio mutuos”, como con el espíritu olímpico (olimpismo) proclamado por Pierre de Coubertin. Si alguien me preguntara “Para qué sigues practicando Judo?”, yo emplearía esas mismas palabras para contestarle, porque el espíritu del Judo, igual que el espíritu olímpico, y también el lema de nuestra ONL, son manifestaciones de una misma idea: a través del deporte contribuir al mutuo entendimiento y a la paz mundial. Convertirse en el competidor más potente no es el objetivo final de quien practica un deporte. Nuestro objetivo en la práctica del deporte es conseguir el equilibrio entre físico y mente, es la ayuda mutua, y es convertirnos en personas capaces de crear y sostener una sociedad en paz.

Hace cuatro años, con la colaboración y apoyo de muchas personas, pude establecer la ONL “Judo, Educación y Solidaridad”. Al tiempo que nos proponíamos responder a

los retos de una mayor penetración internacional del Judo, nuestra idea se centró en alcanzar la función social que el destino tiene reservada para este deporte. Las columnas o puntos de apoyo de nuestra actividad son estas tres: “Incrementar la penetración internacional del Judo”, “A través del Judo incrementar los intercambios culturales y el entendimiento de culturas distintas a la propia”, “Formación de niños y jóvenes en los valores del Judo”. Y por todo ello nuestro lema se resume en: “Judo / Amistad / Paz”

Este lema no es algo que se me ocurriera a mí por las buenas. De hecho, rebuscando en las fuentes, se aprecia que este lema ya lo había pronunciado mi admirado Maestro el fundador de la Universidad Tokai Profesor Shigeyoshi Matsumae, cuando desempeñaba el cargo de Presidente de la Federación Internacional de Judo (1979 – 1987). Yo simplemente he heredado el lema y sigo utilizándolo sin modificarlo. Y espero no limitarme simplemente a repetir las palabras, porque me he juramentado a heredar, proseguir y seguir transmitiendo también el espíritu que inspiró esas palabras. Al Profesor Shigeyoshi Matsumae le tocó vivir de lleno y en primera línea las convulsiones del siglo XX, como hombre de ciencia, como funcionario de la administración, como educador, como político, como activista internacional, y muy decididamente como atleta competidor de Judo. Como persona que tuvo el honor, el placer y la fortuna de tratarle y beneficiarme de su ejemplo, puedo dar testimonio de que esa convicción suya de que el Judo está destinado a “aunar los corazones de la gente de todo el mundo y construir una sociedad en paz” fue su inspiración y su fuente de energía. Y estoy convencido de que al presentar su candidatura a presidir la Federación Internacional de Judo a pesar de su entonces ya avanzada edad, no hacía más que ser fiel a esa convicción vivida por él como una vocación. El año pasado pudimos celebrar una sesión retrospectiva para conmemorar su asunción del cargo de Presidente de la Federación Internacional de Judo 30 años atrás (diciembre

de 1979), lo cual nos dio ocasión para leer una serie de notas suyas de la época, que reflejan su estado de ánimo y lo que pasaba por su mente al tomar esa decisión tan importante. Esos escritos, compilados por su secretaria Noriko Kanehiro, se publican ahora por primera vez. Al leer esos papeles “Sobre mi decisión de presentar mi candidatura a presidir la Federación Internacional de Judo”, me sentí hondamente impresionado, y todo ello me trajo a la memoria algo que en vida me había dicho el Profesor Matsumae.

“Escucha bien, muchacho. Mi apoyo a tu carrera no es solamente porque espero que seas muy fuerte y ganes muchos torneos. Lo que espero de ti es que entiendas el espíritu del Judo y ello te convierta en una grandísima persona. Tus miras deben abarcar el mundo entero, y tus convicciones deben hacer de ti un activista. Eso es lo que espero de ti.” Entre líneas todavía puedo escuchar aquel vozarrón suyo, y aquella su mezcla de tonos que compaginaban la reprimenda con los ánimos.

El lema “Judo / Amistad / Paz” resume a la perfección las aspiraciones del Profesor Matsumae. El ideal que persigue la ONL “Judo, Educación y Solidaridad” y la orientación de todas sus actividades están también perfectamente expresadas en este lema.

A todas las personas que sienten con nosotros los objetivos de nuestra Organización, y que colaboran con nuestras actividades, hemos querido facilitar la lectura del documento “Sobre mi decisión de presentar mi candidatura a presidir la Federación Internacional de Judo”, lectura que les recomiendo encarecidamente. Por ello hemos preparado esta vez la publicación del documento, con el deseo de que su difusión ayude eficazmente a ampliar el círculo de influencia de nuestra actividad.



## **Mi candidatura a presidir la Federación Internacional de Judo**

Abril de 1979

**Shigeyoshi Matsumae**

En diciembre del año pasado anuncié mi candidatura al cargo de Presidente de la Federación Internacional de Judo, y cuando esta información trascendió al dominio público a través de la prensa escrita, las primeras reacciones que pude escuchar fueron de sorpresa porque la Federación Internacional de Judo no estuviera presidida desde siempre por un japonés. Se trata de un deporte originado en Japón, que ahora ya lleva tiempo reconocido como competición olímpica, y supongo que a quienes no están directamente vinculados con el Judo les cuesta creer que la organización internacional que ampara a este deporte, extendido hoy día por todo el mundo, pueda estar presidida por alguien que no sea japonés. Sin embargo, de hecho, la Federación Internacional de Judo lleva ya 14 años presidida por el británico Sr. Palmer.

A pesar de lo cual, el hecho de presentar yo mi candidatura a la presidencia no responde a un impulso nacionalista de vía estrecha obsesionado con recuperar para Japón la presidencia de un deporte originado en Japón y ahora extendido por el mundo. Que un deporte nacido en Japón se haya internacionalizado y que su federación internacional esté presidida por un no japonés es la mejor prueba del reconocimiento mundial cosechado por dicho deporte, de lo cual hay que alegrarse, por el grado de madurez y normalidad que ello implica. Y sin embargo, presento precisamente ahora mi candidatura a presidir la federación, primero porque entiendo que una implicación directa y comprometida de Japón, país que creó este deporte, es sin duda alguna imprescindible en estos momentos para incrementar la penetración internacional del Judo, y, por otra parte, porque ello nos brinda una oportunidad de oro para que Japón sea mejor conocido y apreciado como país en la sociedad internacional, y que sea valorado no por un

creciente poderío militar o por una arrolladora superioridad económica, aspectos que no pueden sino provocar crítica y prevención en los países de nuestro entorno, como ya está ocurriendo, sino por su contribución a la paz y a la amistad entre las gentes, lo cual se puede conseguir, y considero que es imprescindible conseguir, a través de un deporte como el Judo.

En los últimos diez años, como Rector de Tokai University y como Presidente de Japan Cultural Association, cuyo cometido son los intercambios científicos y culturales con todos los países del mundo, me ha tocado visitar numerosos países en los hemisferios oriental y occidental. Ello me ha permitido captar con dramática claridad un par de realidades. Una, que la comprensión de Japón fuera de nuestro país es a todas luces deficiente, y no sólo esto sino que se han instalado como tópicos que nadie pone en duda múltiples interpretaciones equivocadas y hasta disparatadas, con el resultado de que la valoración de Japón es alarmantemente baja. La otra realidad es que, aun dentro del entorno que acabo de describir, el Judo y el Karate han penetrado de forma sorprendente en todas partes y que de entre todo lo proveniente de Japón, los deportes creados por Japón gozan de un extraordinario prestigio y estima.

No hace tanto tiempo que dio la vuelta al mundo la calificación que el Presidente francés De Gaulle dejó escapar sobre el Primer Ministro Japonés, llamándole: “ese vendedor de transistores” Ciertamente desde entonces el espectacular crecimiento económico de Japón ha llamado la atención de todo el mundo, que hoy día todos reconocen la gran calidad de los productos industriales japoneses, y que por fortuna va desapareciendo la imagen estereotipada que cundió durante mucho tiempo, relacionada con Japón, de “productos baratos, sí, pero no gran cosa”. Sin embargo, al preguntarnos si el alto nivel alcanzado por la industria japonesa ha ayudado a elevar la estima que en el extranjero se tiene de Japón y de los japoneses, por desgracia hay que reconocer que no es éste el caso, porque se percibe que aunque ciertamente los productos fabricados en Japón son de alto nivel, la gran mayoría de productos industriales de circulación mundial fabricados en Japón son originalmente inventos euro-americanos, a los que los japoneses simplemente han incorporado modificaciones o mejoras.

En este sentido, creo que se puede afirmar que la

descripción despectiva del Presidente De Gaulle que he citado antes sigue vigente en Europa como emblemática de la visión que se mantiene allí sobre Japón y los japoneses.

Hablando con toda claridad, si en la sociedad europea se pregunta: “entre chinos y japoneses, a quién respeta y admira usted más”, la respuesta, sin vacilaciones, será: “a los chinos”. Y eso se fundamenta en que, aunque la China actual no esté preparada para alcanzar una producción industrial moderna de alto nivel, en Europa se conocen y valoran muy positivamente las importantes aportaciones originales de la cultura y artesanía chinas a lo largo de milenios. De ahí viene la fascinación europea hacia China, lo chino y los chinos.

Lo cual no llamaría la atención si Japón no tuviera también una cultura propia de alto nivel. Porque aunque no podamos contrastar milenio a milenio nuestra andadura con los cuatro mil años de historia china, es un hecho que Japón ha sabido crear una cultura propia de la que puede enorgullecerse ante el mundo. Todos los años acudo a las exposiciones de libros y documentos japoneses y otras manifestaciones culturales, organizadas por el Centro Europeo de Tokai University en Copenhague, que se ven favorecidas por una nutrida concurrencia tanto de funcionarios como de ciudadanos en general, los cuales invariablemente se muestran altamente impresionados, y expresan un profundo interés por la cultura japonesa. De forma parecida, hace cinco años, con la colaboración del Presidente de Suntory Sr. Saji, en el Museo de Bellas Artes Pushkin en Moscú, montamos una exposición de artesanía tradicional de Japón, e incluso ahora no puedo olvidar el brillo de admiración en los ojos de los más de cien mil visitantes, que invariablemente quedaron prendados del delicado sentido de belleza que transpiran esas obras de artesanía tradicional de Japón. Estoy convencido de que, sin excepción, quienes visitaron cualquiera de las manifestaciones culturales mencionadas, salieron impresionados por el arte, la belleza, la calidad de la cultura, la originalidad y la creatividad japonesas, más allá de reconocer que Japón es una potencia económica e industrial.

Por fin parece que alguien ha empezado a destacar el dato de que, en comparación con los países avanzados de occidente, la cifra que Japón destina a intercambios culturales internacionales o al intercambio de estudiantes e

investigadores, es sorprendentemente baja. Siendo esto así, no es extraño que la imagen que se tiene de Japón en el extranjero no mejore, y no se puede esperar que crezca el aprecio y respeto hacia los japoneses en el mundo.

Es preciso señalar y resaltar también el cúmulo de facilidades proporcionadas por los países avanzados de occidente a extranjeros que quieren aprender su lengua o estudiar su historia y demás contenidos relacionados con el país. De hecho, muchísimos japoneses se han beneficiado de becas Fulbright para estudiar en Estados Unidos, o de esquemas parecidos de la fundación Frederick-Ebert-Stiftung de la República Federal Alemana, o de los programas del Athénée Français de Francia, con lo que han podido estudiar y siguen estudiando en el extranjero. Comparado con esto, cuando se pondera lo que ha hecho Japón a la inversa para atraer estudiantes y estudiosos extranjeros, se le cae a uno la cara de pura vergüenza, por impresentable.

Permítanme un inciso. El fondo que establecí el año pasado, llamado Matsumae International Foundation, dentro de las posibilidades y limitaciones de un fondo totalmente privado, invita a Japón a investigadores japonólogos del extranjero y les proporciona la correspondiente beca, con lo cual, aunque sea en una proporción mínima, intenta devolver a los países avanzados de occidente parte de lo recibido hasta ahora por japoneses, y al mismo tiempo, la fundación también se propone facilitar los estudios de Japón a investigadores japonólogos de países en vías de desarrollo, con dificultades de acceso a los recursos necesarios.

En cualquier caso, de no desplegar un esfuerzo muy decidido para promover intercambios internacionales e intercambios de estudiantes e investigadores, no solamente veremos agudizarse las prevenciones y críticas hacia un Japón convertido en superpotencia económica, sino que no habrá ninguna posibilidad de que las cosas mejoren. En este sentido, nuestro país se encuentra en una situación de acoso, obligado por las circunstancias a tomar medidas concretas y efectivas, si realmente quiere dar la vuelta a dicha situación.

Ahora bien, la cuestión es: cómo puede y debe Japón dar a conocer su cultura en el extranjero, y, a través de la cultura, cómo conseguirá ganarse la comprensión y profundizar el respeto hacia Japón.

Para mí, esta cuestión nuclear tiene su respuesta en el Judo.

Ni que decir tiene, habrá que seguir con la clase de exposiciones de artesanía tradicional o de bellas artes, etc., como las que he descrito antes. Y tal como he apuntado, habrá que incrementar los esfuerzos en intercambios internacionales en general e intercambios de estudiantes e investigadores en particular. Ahora bien, todos estos trabajos son intensivos en el empleo del tiempo, y sus frutos no se pueden recoger en el corto plazo. Tampoco es posible mantener exposiciones de arte, etc. abiertas y accesibles de forma permanente en todas partes. Pero si ampliamos el plano de visión hacia otras posibilidades disponibles, tenemos la fortuna de contar con el Judo, un producto cultural japonés de primer orden, en el sentido amplio del concepto cultura, que a pesar de que hasta ahora no ha obtenido ningún apoyo especial del gobierno japonés, ha conseguido una gran penetración en todas partes, ha conquistado la imaginación y la adhesión de muchísima gente, y sus seguidores no hacen más que crecer día a día, incluso hoy.

Hay muy pocas poblaciones en Europa o Norteamérica que no tengan por lo menos un “dohjoh” para Judo. Uno echa un vistazo dentro de cualquier gimnasio de una pequeña población, y sin falta encuentra allí dentro su club de Judo y su club de Karate, y percibe el ambiente de concentración total y de estricta corrección de un gran número de personas que entrenan bajo las órdenes de un japonés que les instruye con verdadera pasión, o, en otros casos, con un instructor nativo previamente entrenado por un japonés. Los participantes disfrutan de un deporte concebido en Japón, con vestimenta diseñada en Japón, e intercambiándose palabras y frases en japonés.

Lo más importante es que los participantes no solamente ejercitan sus músculos y habilidades, sino que a través de un deporte japonés adquieren simpatía hacia Japón, alcanzan una comprensión del espíritu de Japón, y cada día se afianza más en ellos la sintonía y amistad hacia Japón.

Que gentes de todo el mundo amen el Judo, y el Judo les fascine y enganche, se debe a que en este deporte han descubierto la originalidad japonesa y unos valores irremplazables de alto nivel con los que aspiran a identificarse en su vida personal.

Mi candidatura a la presidencia de la Federación Internacional de Judo pretende, a través de una mayor

extensión de este deporte a un crecido número de practicantes en todas partes del mundo, conseguir un alto nivel de comprensión hacia la cultura japonesa, cambiar la imagen de Japón, incluso esculpir y grabar en las mentes de la gente una imagen nueva de Japón. Mi candidatura no responde a un impulso que me haya asaltado ahora de repente. Es fruto de lo mucho que he pensado en estas cosas durante los últimos quince años, es parte integrante de mi trabajo centrado en los intercambios culturales a nivel internacional, y, finalmente, lo considero como, con toda probabilidad, el último trabajo importante que la vida me está proponiendo, y hasta exigiendo.

Considero que es demasiado pronto para dejar en manos de un no japonés la internacionalización de un deporte como el Judo, que es una expresión tan clara de la originalidad cultural de Japón. Son muchas las cosas que a Japón le quedan todavía por hacer en este terreno. Hay temas en los que va a ser imprescindible involucrar al gobierno japonés y obtener de él una sustancial ayuda económica. Porque aunque sin duda hay países como Francia o Dinamarca o la Unión Soviética que, a través de federaciones y comités nacionales o locales garantizan la libre elección y participación de los ciudadanos en diversos deportes incluido el Judo, con óptimas instalaciones y adecuados cuadros de instructores y entrenadores, etc., en número son todavía más los países que no cuentan con suficientes o adecuadas instalaciones deportivas, y cuyos cuadros de instructores dejan mucho que desear. Además de que faltan libros de texto e instrucción, y los que circulan son deficientes. No hay que olvidar que, para empezar, los libros de instrucción de Judo escritos originalmente en japonés son en sí de difícil traducción.

Japón tiene la ineludible e inapelable obligación de compensar y solucionar esas carencias, dentro de un esfuerzo serio y sostenido.

Colaborar en la construcción de “dohjohs” en todos los países del mundo donde falten. Habrá casos en que esté perfectamente justificado el soportar todo el peso financiero de la construcción y equipamiento. La competencia feroz en los mercados del automóvil o los transistores siempre despierta reacciones de defensa en los países alcanzados. La reacción negativa está protagonizada no sólo por gobiernos sino también, y con especial virulencia, por sindicatos y

organizaciones obreras, que ven peligrar sus propios puestos de trabajo como resultado de las incursiones de la industria japonesa. En contraste con lo anterior, la penetración del Judo como deporte siempre es bien recibida, incluso con satisfacción, por gentes de todo el mundo, y nunca ha provocado la más mínima crítica o reacción negativa. Contribuye al desarrollo personal de sus seguidores, mejora su nivel de salud y bienestar, y encima consigue ganar amigos y admiradores para Japón en todos los países del mundo. De una sola tacada se consigue un doble beneficio.

Una mayor penetración del Judo en todo el mundo debe ser un objetivo serio de Japón como país, implicando tanto al gobierno como a la sociedad civil. Para ello, encuentro imprescindible que el próximo presidente de la Federación Internacional de Judo sea un japonés.

Más adelante, en el futuro, una vez se hayan construido en todo el mundo los “dohjohs” para Judo y Karate que ahora faltan, y en todas las lenguas del mundo haya disponibles textos y libros de instrucción de calidad, y el número y nivel de instructores sea el adecuado, entonces sí, proclamo que ya no importará de qué país proviene el presidente de turno de la Federación Internacional de Judo.

Lamentablemente, cuando Japón perdió la presidencia de la Federación Internacional de Judo, renunció de hecho a liderar el Judo a nivel mundial.

Ahora bien, para poder cumplir en forma enérgica el programa que yo acabo de esbozar, es de todo punto necesario recuperar para Japón la presidencia de la Federación Internacional.

El año pasado tuve que someterme a una celebración de mi cumpleaños número 77. Me sirvió para tomar una decisión: dedicar el resto de vida que me pueda quedar a la internacionalización un deporte, el Judo, que desde los 15 años de edad y durante los 60 años siguientes, yo amé y practiqué con pasión, y a través del “camino” del Judo, descubrir y desarrollar para Japón un futuro con amplia aceptación y estima del resto de países. Este trabajo, visto desde el punto de vista del desarrollo de intercambios internacionales a través del deporte, será al final una valiosa contribución a la paz mundial.

El Judo es el deporte que más claramente incide en valores como la paz, el respeto y las buenas maneras. Podría decirse, en este sentido, que es una cristalización del espíritu

genuinamente japonés. Me propongo extender por todo el mundo estos valores del espíritu.